

日本のバスケットボール競技におけるオフェンス参加人数に関する史的 研究 (1920年代初期～1930年代初期)

——5人でのオフェンスの採用過程に着目して——

A Historical Study of Number of Participants in the Offense in Basketball (Early 1920-Early 1930):
Focusing on the process of the adoption of the 5men Offense

小谷 究 (日本体育大学)

抄録

本研究は、1920年代初期の日本におけるバスケットボール競技のオフェンスが4人で行われた背景を検討したうえで、1930年代初期に5人でのオフェンスが採用された経緯について明らかにすることを目的とした。

本研究における検討の結果は、以下のように整理できる。

1920年代初期にオフェンスが4人で行われた背景には、バックコートでのガードの役割があった。しかし、1924年に早稲田大学が採用して以降、多くのチームが5人でディフェンスを行う3-2ゾーンディフェンスを用いるようになったことにより、オフェンス側は数的不利な状況となった。また、3-2ゾーンディフェンスの採用により、スリーパー・オフェンスが使用できなくなり、ガードがバックコートに残る必要がなくなった。さらに、1932年のバックコート・ヴァイオリエーションの規定により、ガードはボールを受けてオフェンスを立て直すためにフロントコートへと進出するようになった。

このような状況を背景として、日本では1920年代末頃から5人でのオフェンスが採用されるようになった。

1. 問題の所在

日本バスケットボール協会は、日本のバスケットボール競技の現状について、世界の強豪国、アジアのライバル国に遅れをとり、確実にその差は広がっていると認識し、世界と互角に戦い、世界で勝つための「ジャパン オリジナル バスケットボール」の創世を訴えている(兼子, 2002)。この「オリジナル」について日本バスケットボール協会は、「合理的で効率の良い、スマートで華麗なプレー」としており、ここでは技術だけでなく戦術も含まれる。

この勝つための戦術を考案するには、今日用いられている戦術を理解するだけでは必ずしも十分ではない。「戦術」

は、実戦を通して経験的に得られた認識が、理論として構築されたものであり、それゆえ無秩序ではなく、系統的に発達し得るものであることから(瀧井, 1990)、戦術がどのような経過を経て発展し、現在に至っているかを明らかにしなければならない。

スポーツにおける戦術の歴史的研究の重要性については、スポーツ史の研究者である岸野雄三らが近代日本のスポーツ技術の歩みをまとめた著書『スポーツの技術史』において詳しく検討されている。岸野(1972)は、従来のスポーツ史研究が「たんに懐古的あるいは好笑的な趣味を脱して、スポーツの発展を文化との関係から位置づけ、それを文化史的に一般化すること」に主眼を置いたものを高く評価する傾向にあったことを指摘し、今後もそのような研究が数多くなされることに期待する一方、「スポーツ運動そのものに眼をむけ、技術的な側面からスポーツの発達を追求していくようなスポーツ史の開拓も、ぜひ試みられなければならない」とし、さらに、「新しい技術史の分野が、いま必要なのである」と提言している。ここでの「技術」とは厳密な意味ではスポーツ技術に属しないような戦術をも含んだものであるとされていることから、ここに戦術の歴史的研究の意義が読み取れるものである。

さて、ここで、日本におけるバスケットボール競技の戦術の歴史に目を向けると^{注1)}、1922(大正11)年頃のポジションの内訳はフォワード2人、ガード2人、センター1人であり、各ポジションの役割は主に、ガードがディフェンス、フォワードがオフェンス、センターはその両方と区別されていた。そのため、ゲームにおけるオフェンスの役割は、主にフォワード2人とセンター1人の計3人に任されていたが、状況に応じて2人のガードのうち1人はオフェンスにも参加した。つまり、1920年代初期のオフェンスは最大でも4人のプレイヤーによって展開された(小谷, 2014)。その後、1930(昭和5)年頃になると、今日ではあたりまえのように用いられる5人でのオフェンス^{注2)}が行われるようになった(藤田, 1979)。

日本のバスケットボール競技における技術及び戦術の歴史について研究した牧山(1972)は1932(昭和7)年、1933(昭和8)年頃よりガードのなかに中長距離シュートに優れたプレイヤーがでてくるようになり、さらにフォーメーションが高度化するにつれて、5人でのオフェンスが行われるようになったとしている。また、技術の歴史について考察した藤田(1979)は、日本では1930(昭和5)年頃になると5人でオフェンスを行う近代バスケットボール競技の様相を呈してきたとしている。しかし、いずれの研究も5人でのオフェンスの概要について触れている程度であり、5人でのオフェンスの採用過程について詳細な分析が行われているとはいえない。

そこで本研究では、1920年代初期の日本におけるバスケットボール競技のオフェンスが4人で行われた背景を検討したうえで、1930年代初期に5人でのオフェンスが採用された経緯について明らかにすることを目的とする^{注3)}。

2. オフェンスが4人で行われた背景にあったガードの役割

1920年代初期、主にオフェンスを行っていたのは、フォワード2人とセンター1人の3人であった。しかし、状況に応じて2人のガードのうち1人はオフェンスにも参加したことから、オフェンスは最大でも4人で展開された(小谷, 2014)。それでは、オフェンス時にバックコート^{注4)}に残ったガードにはどのような役割があったのだろうか。

1920年代初期の日本では、フロントコート^{注5)}に残っているプレイヤーにロングパスを出すことにより、速い展開で攻撃するスリーパー・オフェンスが用いられていた(小谷, 2013)。したがって、2人のガードのうち1人は、オフェンスの場面であっても攻防が切り替わった際、バックコートにいる相手チームのフォワードにロングパスを送られないようにバックコートに残る必要があった。1926(大正15)年発行の『バスケットボール大要』では「バスケット付近に1人のフォワード(フォワード—引用者注)を残して置く戦法のチーム(チーム—引用者注)に対しては必ず1人のガードをそれにつけて置く必要がある」(外山, 1926)と述べられている。このように、当時の2人のガードのうち1人には、相手チームのスリーパー・オフェンスに対するセーフティーマンとしての役割があった。

この役割に加えて、当時のガードにはバックコートにおいてオフェンスを立て直す役割があった。1925(大正14)年発行の『バスケットボール』では、ガードの役割について図1とともに以下のように述べられている(鈴木, 1925)。図1では、①がセンター、②・③がフォワード、④・⑤がガードを表しており、点線の矢印が人の動き、実線がパスによるボールの動きを示している(図1)。

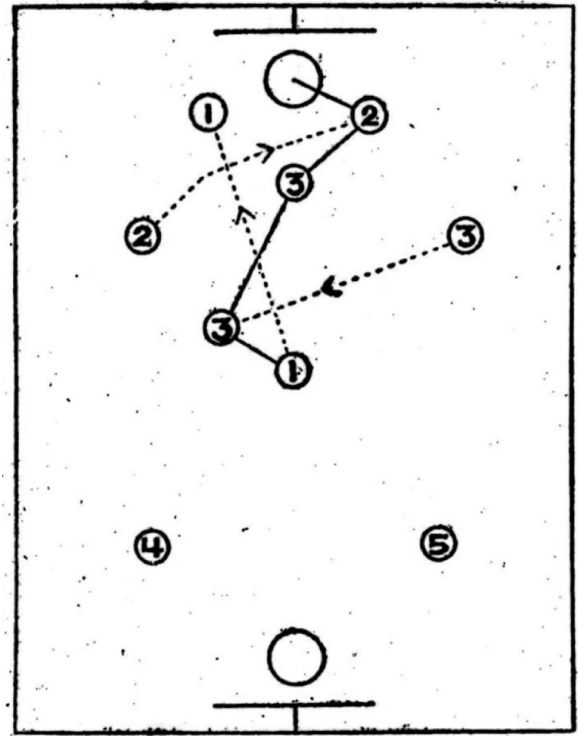


図1:フォーメーション[※]

※鈴木精一(1925)バスケットボール, 教文書院:東京, より転載。

此の形式に於ては、ガードは後方に居つて彼の方に来るボールをフォワードや、センターに送り返す様にする。

また、1928(昭和3)年発行の『籠球コーチ』では「味方のゴール附近へ兩軍が多く集まつてボールを奪ひ合つて居る時には、味方の一人(通例ガード)はコートの隅かフリー・スロー・ラインの處でパスを待つて居ること」(鈴木, 1928)と述べられている^{注6)}。さらに、1930(昭和5)年発行の『指導籠球の理論と実際』においても「何れの攻撃の場合に於いても、攻撃方式は交互に適宜に變替すべきものであつて、パスがそれ以上前進しない場合とか、或る方式のプレーが奏功せぬ時など、直ちに球を後方ガードに返へして攻撃を再開するやうにしなければならぬ」(李, 1930)とされている。このように、バックコートで待機しているガードには、オフェンスが行き詰った際にボールを受け、それを再びフロントコートへ返すことで、オフェンスを立て直す役割があった。以上に示したように、オフェンスが4人で行われた背景には、オフェンス時におけるバックコートでのガードの役割があったといえよう。

3. 5人でのオフェンスが採用された経緯

3.1 早稲田大学による3-2ゾーンディフェンスの導入
1920年代初期の日本においてオフェンスは最大でも4

人のプレイヤーによって展開されていたが、その後5人でのオフェンスが行われるようになった。その要因のひとつとして、早稲田大学（以下「早大」と略す）による3-2ゾーンディフェンス（以下「3-2ゾーン」と略す）の導入があげられる。1920年代初期のゲームにおけるディフェンスの役割は、主にセンター1人とガード2人の計3人に任されていた。一方、オフェンスを行っていたのはフォワード2人とセンター1人の計3人であったが、状況に応じて2人のガードのうち1人はオフェンスにも参加した。その場合に、ディフェンス側はフォワード1人がディフェンスに参加することで対応していたため、当時のディフェンスは最大でも4人で行われていた。しかし、1924（大正13）年に早大が採用して以降、多くのチームがバックコートにおいて5人でディフェンスを行う3-2ゾーンを用いるようになった（小谷，2014）。つまり主に3人、最大でも4人で展開されたオフェンスに対して5人でのディフェンスが行なわれるようになり、オフェンス側は数的不利な状況となった。1926（大正15）年発行の『バスケットボール』では「3人の味方では相手5人の守備を破つて得点する事は非常に困難である此の場合には4人又は全員を擧げて猛烈に攻撃せねばならぬ」（三橋，1926）と述べられている。このように、5人でのディフェンスに対抗するために、5人でのオフェンスを行う必要性が高まったといえよう。

当時の雑誌の記述からは、5人でのディフェンスに対抗するために5人でのオフェンスが用いられた様子がうかがえる。1924（大正13）年に第1回関東大学リーグ戦が立教大学（以下「立大」と略す）、早大、東京商科大学（以下「商大」と記述する）の3校によって開催され、1928（昭和3）年開催の第5回大会まで、立大、早大、商大はこの3校以外の大学に敗れたことがなかったため（関東大学バスケットボール連盟80年史編集委員会，2005）、当時この3校は「ビッグスリー」と評されていた。しかし、1929（昭和4）年開催の第6回大会において立大が明治大学に敗れ、早大が東京帝国大学に敗れた。第6回大会について「体育と競技」では「此度のリーグ戦に於て所謂ビッグスリーの名をして昔日の榮冠を繼續せしめざりし理由は如何？と云へば上位チームの舊來の常道踏習に對する下位新興チームの捨身式の猪突にあるのである」（鈴木，1930）とし、「如何に堅固な防禦陣形（5人でのディフェンス——引用者注）でも5人の敵手の進撃に其デフェンスゾーンを侵された時には如何とも勢ひ、堅陣に破綻を來たさないわけには行かぬ」（鈴木，1930）と述べられている。このように、立大、早大、商大の5人でのディフェンスをなんとか破ろうと、他大学が用いたのが5人でのオフェンスであった。

さらに、早大による3-2ゾーンの導入はそれまでのガードの役割にも影響を与えた。3-2ゾーンはバックコートに

おいて5人でディフェンスを行うものであるため、3-2ゾーンの普及は、4人でディフェンスを行い、フォワード1人をフロントコートに残したスリーパー・オフェンスの衰退を意味していた。そのため、日本では1920年代中頃から3-2ゾーンの普及に伴い、スリーパー・オフェンスが採用されなくなっていった（小谷，2013）。つまり、ガードがオフェンス時にバックコートにいる相手チームのフォワードを警戒する必要がなくなり、フロントコートに進出しオフェンスを5人で展開することが可能となった。

3.2 バックコート・ヴァイオレイションの規定

オフェンスが5人で行われるようになった要因には、早大による3-2ゾーンの導入の他にバックコート・バイオレイションの規定があった。アメリカでは1920年代に入ってから流行したゾーンディフェンスに対し、オフェンス側は少しでもリードすると積極的に攻めないで、安全なバックコートでパスやドリブルを使って時間をつぶす戦術を採った。これによりゲームが停滞し、バスケットボール競技の興味が失われる危険を救うためにフロントコートでボールをコントロールしているチームのプレイヤーは、そのボールをバックコートに返してはならないというバックコート・ヴァイオレイションが規定された（岡，1979）。日本でも1932（昭和7）年施行の『昭和8年度バスケットボール競技規則』において「バック・コートに於てボールを得たチームは10秒以内にボールをセンター・ラインより前方へ進むべし」（大日本バスケットボール協会，1932）という10秒ルールとともに、「ボールを中央線より前方へ進めたる後は…之を再びそのバック・コートに返すべからず」（大日本バスケットボール協会，1932）と所謂バックコート・ヴァイオレイションが規定された^{注7}。バックコート・ヴァイオレイションについて1932（昭和7）年発行の「体育と競技」では以下のように述べられている（竹前，1932）。

そこ（フロントコート）へボールが一度はいつたならば、味方の中の1人でもバックコートにゐる要はない。何故なら特殊の4つの場合の他、バックコートへはボールが返せないからである。従つてその場合に、バックコートにゐるガードがあつたとすれば、それはよほど氣の抜けたガードである。

このように、バックコート・ヴァイオレイションが規定されたことにより、一度フロントコートに運んだボールはバックコートにボールを返せなくなったため、ガードがボールを受けてオフェンスを立て直すには、フロントコートに進出する必要があった。大日本バスケットボール協会の設立に尽力し、設立後は協会の理事としてバスケットボール競技のルールの設定や技術の研究普及等に努め

た(東京体育科学研究会, 1970) 李想白(1934)は, バックコート・ヴァイオリションが規定された後の1934(昭和4)年発行の「アサヒ・スポーツ」において「3人の前衛と1人のガードが動いて残りのガードは時機を見て攻撃へ飛込むか或は行詰まった攻撃陣よりバックパスをもらつて更に有利な攻撃を開始する方法が多い」と述べており, さらにボールを受けてオフェンスを立て直すガードについて「場合によつては中央の敵前線を突破することも(中央の敵が後退せる場合は直ちに投射することも)できるやうになつてなければなりません」と加えている. このように, バックコート・ヴァイオリションが規定された後も, ガードにはボールを受けてオフェンスを立て直す役割があり, この役割を果たすためにガードはフロントコートに進出した. さらに, このガードはシュートして得点することも求められた. 1933(昭和8)年発行の「アサヒ・スポーツ」には「改正された『10秒』規則にもよるがガードの進歩顕著なる…ガード・プレーによる得点には大いに見るべきものがあつた」(小久保, 1933)との記述が残されている. このように, オフェンスが5人で行われるようになった背景には, 早大による3-2ゾーンの導入とバックコート・ヴァイオリションの規定があつた.

4. 5人でのオフェンスの紹介と採用

このように, 5人でのディフェンスが採用され, バックコート・ヴァイオリションが規定されると, バスケットボール競技の指導書では5人でのオフェンスが紹介されるようになった. 1928(昭和3)年発行の『籠球必携』では, 5人でのオフェンスについて以下のように説明している(バスケットボール研究会, 1928).

Five-man offenseは, ボールが完全に味方のものになつたと見究めるや否や全く, 敵には無關心に, 5人が各自の分を守つて, 5人それぞれの方法で攻めるのである. 此の方法には前者(4人でのオフェンス—引用者注)の如く, 1人だけ(ガード)敵のゴール下に居つて居て, 味方がボールを途中で敵にとられ逆に攻められることに備えるやうなことをしない. これは5人全部で攻撃するのであつて, 一般に稱えられる“良く攻めることは良く守ることである”と云ふ定理に則つた方法である.

さらに, 1930(昭和5)年発行の『指導籠球の理論と実際』では「實戦中最も屢々起り得べき状態の典型を摘出し…成るべく實戦と同様の訓練を與へる爲めに, 5人の競技者をコート上に配列し, その位置も實戦に最も近い状態に在る」フォーメーションの練習法の一つとして図2とともに次のように紹介している(李, 1930). 図2では, C

が指導者, ①・②がフォワード, ③がセンター, ④・⑤がガードを表しており, 実線の矢印が人の動き, 点線の矢印がパスによるボールの動き, 波線の矢印がドリブルによるボールの動きを示している(図2).

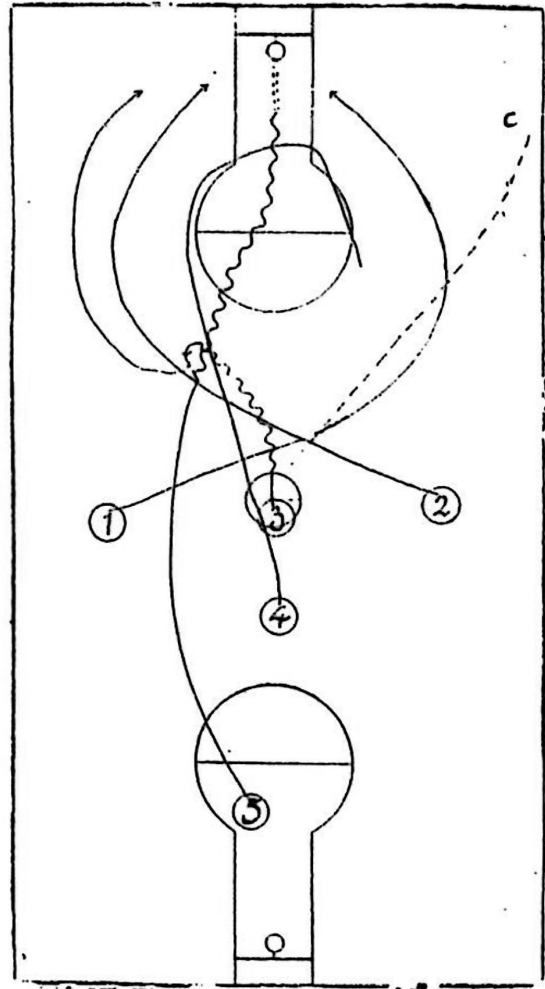


図2: 5人でのオフェンス*

※李想白(1930)指導籠球の理論と実際, 春陽堂:東京, より転載

指導者より球を受けた3はドリブルによつて自由投圓の後方近地に向つて進む. 兩翼の前衛はドリブラーの後方を互ひに交叉して, 上の諸例と同様の進路を取つてバスケットに突進する. 2が丁度ドリブラーの後方を通過する時ドリブラーは外側に向つて廻轉して, 2にパスする如く見せかけてフェイントし, 次に又内側に向きを變へて, 後方より自分の内側を通つてバスケットへ突進するフロア・ガード(4)にパスする如くフェーク・パスし(此時4は又そのパスを取る如くフェークすることいふまでもない), 然る後最後に既にフロア・ガードの位置に前進して, 攻撃に加はるべき用意を完了せるバック・ガード(5)にバック・パスするのである. 此時の5は3よりパスを受けて正

面よりバスケットに向つてドリブル・インするに好適なる位置にゐなければならぬ。センターは最後のパスを終わつたら直ちに向きを變へて、當初の進路を取つて左側よりバスケットに近付き、追躍に備へなければならぬ。

こうして指導書において5人でのオフェンスが紹介されるようになると、実際にゲームにおいて5人でのオフェンスを用いるチームが現れるようになった。1931（昭和6）年開催の第10回全日本選手権大会の東京予選会について「ATHLETICS」には「農大のディレドオフェンスと其から來るファイブメンオフェンス及長投のシステムは新味を見せていゝ頃ぢやなからうか」（阪，1931a）と、東京農業大学が5人でのオフェンスを用いた記述が残されている。また、1931（昭和6）年開催の第8回関東大学リーグ戦において立大は「全員攻撃を唯一の武器」（坂，1931b）としており、1933（昭和8）年開催の第3回全日本高専選手権大会では立教大学予科が5人でのオフェンスを用いた（坂，1933）。1928（昭和3）年発行の『籠球必携』では「現今高級なチームで採用される攻撃法としてはfour-man（4人）及びfive-man（5人）の攻撃」（バスケットボール研究会，1928）があるとしており、1931（昭和6）年発行の「ATHLETICS」には「ガードは得點せぬ者フォワード（フォワード—引用者注）は反則せぬ者と思つたのが、兩者の別なく得點反則大活躍を爲し、敵味方10名が混然として一團のスピディープレー（スピーディープレー—引用者注）を行つてゐる」（茂木，1931）との記述が見られる。また、1933（昭和8）年発行の「アサヒ・スポーツ」において李（1933）は「5人攻撃制が進歩した今日」と述べている。このように、日本では1920年代末頃から5人でのオフェンスを用いるチームが現れるようになった。

5. まとめ

本研究における検討の結果は、以下のように整理することができる。

1920年代初期の日本では、フロントコートに残っているプレイヤーにロングパスを出すことにより、速い展開で攻撃するスリーパー・オフェンスが用いられていたため、2人のガードのうち1人は、オフェンスの場面であっても攻防が切り替わった際、バックコートにいる相手チームのフォワードにロングパスを送られないようにバックコートに残る必要があった。また、バックコートで待機しているガードには、オフェンスが行き詰った際にボールを受け、それを再びフロントコートへ返すことで、オフェンスを立て直す役割もあった。このように1920年代初期にオフェンスが4人で行われた背景には、オフェンス時におけ

るバックコートでのガードの役割があった。

しかし、1924（大正13）年に早大が採用して以降、多くのチームがバックコートにおいて5人でディフェンスを行う3-2ゾーンを用いるようになったことにより、最大でも4人でのオフェンスに対して5人でのディフェンスが行われるようになり、オフェンス側は数的不利な状況となった。また、3-2ゾーンの採用により、プレイヤー1人をフロントコートに残すスリーパー・オフェンスを用いることができなくなり、ガードがオフェンス時にバックコートにいる相手チームのフォワードを警戒する必要がなくなった。さらに、1932（昭和7）年にバックコート・ヴァイオレーションが規定されたことにより、一度フロントコートに運んだボールはバックコートに返せなくなったため、ガードはボールを受けてオフェンスを立て直すためにフロントコートへと進出した。

このような状況を背景として、日本では指導書において5人でのオフェンスが紹介されるようになり、1920年代末頃から5人でのオフェンスを用いるチームが現れるようになった。

注

注1) 日本におけるバスケットボール競技の歴史を紐解くと、1913（大正2）年、日本YMCA同盟の体育事業専門主事の派遣要請に応え、アメリカからFranklin H. Brown（以下「ブラウン」と略す）（1882-1973）が来日したことを契機として、バスケットボール競技の本格的な伝播と定着、発展がはじまった（薬師寺，1927）。ブラウンは、神戸、京都、横浜、東京とそれぞれのYMCAを通じてバスケットボール競技の普及につくしたため、競技移入後の日本のバスケットボール競技はYMCAを中心に行われ（近藤，1921）、1921（大正10）年から開催された全日本選手権大会においては、第1回-第3回大会まで東京YMCAが3連覇を成し遂げた（荒木，1922；日本バスケットボール協会広報部会，1981；西村，1923）。その後、1925（大正14）年開催の第5回大会での東京YMCAの優勝を最後に、学生チームの優勝が続き、しだいに日本のバスケットボール競技の本流は、YMCAから大学へと移っていった（薬師寺，1927）。

注2) 本稿における「5人でのオフェンス」とは、オフェンス時に5人全員がフロントコート内に入るオフェンスを意味する。

注3) 本文中の引用文における漢字、仮名づかい、送りがなは、原則的に原文のままとしたが、文献のタイトルの漢字は、常用漢字に改めた。また、引用文

中の漢数字は算用数字に変換して記した。

- 注4) 「バック・コートとは、自チームのバスケットのうしろのエンド・ラインからセンター・ラインの遠いほうの縁までのコートの部分」(日本バスケットボール協会審判・規則部, 2011)とされる。
- 注5) 「フロント・コートとは、相手チームのバスケットのうしろのエンド・ラインからセンター・ラインの近いほうの縁までのコートの部分」(日本バスケットボール協会審判・規則部, 2011)とされる。
- 注6) 今日では「1チームが攻撃するバスケットを『相手チームのバスケット』といい、防御するバスケットを『自チームのバスケット』という」(日本バスケットボール協会審判・規則部, 2011)が、当時は「味方のゴールとはチームのボールを投げ入れんとするバスケットを意味」(極東体育協会, 1917)しており、当時の史料に記述されている「味方のゴール」は、今日の「相手チームのバスケット」を指している。
- 注7) 『昭和8年度バスケットボール競技規則』では、「此の条項に反したる場合ボールは境界線外に於て相手方のものとなる」(大日本バスケットボール協会, 1932)とされ、10秒ルール、バックコート・ヴァイオリジョンに違反した場合は相手チームのボールとなった。ただし、「(1) ゴールに向つてボールを投ずるか。(2) ジャンプ・ボールが起りたるか。(3) アウト・オブ・バウンズが宣せらるゝか。(4) 相手方によりボールを取られた後再び取返すか」した場合に「フロント・コートに於てボールを得たる時は之を1度だけセンター・ラインよりバック・コートに返す事」(大日本バスケットボール協会, 1932)ができた。この規定は翌年施行の『昭和8・9年度バスケットボール競技規則』では、「(1) (2) (3) 及 (4) の條項によりて、フロント・コートに於てボールを得たる時は、最初に之に觸れたるものに限り1度だけバック・コートに返す事を得。フロント・コートに於て2度目の競技者が之に觸れたる後はバック・コートに返す権利消滅す。但し此の後前4項のプレイ起りたる時は此の限にあらざ」(大日本バスケットボール協会, 1933)と改定された。

文献

荒木直範(1922) バスケットバレーボール大会印象記。

ATHLETICS, 1(5): 35-37.

- バスケットボール研究会編(1928) 籠球必携。東京運動社：東京, p.9.
- 竹前友次郎(1932) 籠球規則改正に就いて。体育と競技, 11(11): 88.
- 大日本バスケットボール協会編(1932) 昭和8年度バスケットボール競技規則。大日本バスケットボール協会：東京, pp.61-62.
- 大日本バスケットボール協会編(1933) 昭和8・9年度バスケットボール競技規則。大日本バスケットボール協会：東京, pp.66-67.
- 藤田修一(1979) バスケットボールの基礎技術の歴史的考察。新潟大学教育学部高田分校研究紀要, (24): 125.
- 兼子勲(2002) はじめに、日本バスケットボール協会エンデバー委員会編, ENDEAVOR PROJECT. 日本バスケットボール協会：東京, p.1.
- 関東大学バスケットボール連盟80年史編集委員会編(2005) 関東大学バスケットボール連盟80年史。関東大学バスケットボール連盟80年史編集委員会：東京, p.176.
- 岸野雄三(1972) スポーツの技術史序説。岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史。大修館書店：東京, pp.15-23.
- 小久保生(1933) 全関西籠球大会記。アサヒ・スポーツ, 11(10): 22.
- 近藤茂吉(1921) バレーボールとバスケットボール。運動界, 2(4): 65.
- 小谷究(2013) 1920年代の日本におけるバスケットボール競技のファストブレイクに関する研究—スリーパー・オフENSEの採用と衰退に着目して—。運動とスポーツの科学, 19(1): 74.
- 小谷究(2014) 日本のバスケットボール競技におけるゾーンディフェンスの導入過程に関する史的探究：Franklin H. Brownが紹介した3-2ゾーンディフェンスに着目して。スポーツ史研究, (27): 3-6.
- 極東体育協会編, 佐藤金一訳(1917) バスケット, ボール規定。極東体育協会：東京, p.14.
- 牧山圭秀(1972) バスケットボールの技術史。岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史。大修館書店：東京, pp.378-382.
- 三橋義雄(1926) バスケットボール。広文堂：東京, p.166.
- 茂木貞三(1931) 我籠球部の生ひ立。ATHLETICS, 9(1): 132.
- 日本バスケットボール協会広報部会編(1981) バスケットボールの歩み。日本バスケットボール協会：東京, pp.43-614.
- 日本バスケットボール協会審判・規則部編(2011) 2011～バスケットボール競技規則。日本バスケットボール協会：東京, pp.9-11.
- 西村正次(1923) バスケットボール代表権は東京青年会組に帰

- す. ATHLETICS, 2(4): 132-139.
- 岡三郎 (1979) バスケット・ボールルールに関する史的研究. 早稲田大学体育研究紀要, (11): 64.
- 李想白 (1930) 指導籠球の理論と実際. 春陽堂: 東京, pp. 453-484.
- 李想白 (1933) 籠球のプレイシステム解説. アサヒ・スポーツ, 11(3): 33.
- 李想白 (1934) バスケットボールの連絡と準備運動の可否. アサヒ・スポーツ, 12(4): 29.
- 阪勘造 (1931a) 早大・成蹊・代表となる. ATHLETICS, 9(3): 105.
- 坂勘造 (1931b) 終末近き十大学籠球リーグ戦. アサヒ・スポーツ, 9(28): 17.
- 坂勘造 (1933) 全日本高専籠球大会評. アサヒ・スポーツ, 11(11): 18.
- 鈴木精一 (1925) バスケットボール. 教文書院: 東京, p. 123.
- 鈴木重武 (1928) 籠球コーチ. 矢来書房: 東京, p. 181.
- 鈴木東平 (1930) 昭和4年8大学籠球リーグ戦評. 体育と競技, 9(2): 86.
- 瀧井敏郎 (1990) 戦術の運動学的認識. 金子明友, 運動学講義. 大修館書店: 東京, p. 78.
- 東京体育科学研究会編著 (1970) 体育人名辞典. 逍遥書院: 東京, p. 283.
- 外山慎作 (1926) バスケットボール大要. 外山慎作: 新潟, pp. 54-55.
- 薬師寺尊正 (1927) バスケットボール. アルス文化大講座, 4: 7-8.

連絡責任者

住所: 〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1 日本体育大学

氏名: 小谷 究

電話番号: 03-5706-0900

メールアドレス: kotani906@nifty.com